

“安心をお届けする” 訪問診療  
**「わかば便り」**  
 第27号 (R1.11)

家族の精神的、肉体的な介護負担軽減の事例として、2回にわたり広く利用されている介護サービスを利用した事例をご紹介します。そこで、今月号では少し視点を変えて、ご本人の負担や不安、ご家族の介護負担を軽減するために、再入院された事例をご紹介します。

**【事例】 Aさん 75才 (男性) 要介護3  
 ご夫婦 (近くにお子様在住) ガン末期**

(1) ご本人の病状と心境

- ・Aさんはご自身の病状から、最期は住み慣れた自宅で過ごしたい、と強く希望され、退院に向けた準備が開始となりました。
- ・ただ、時間の経過と共に、退院前は体力も低下し、1人でトイレに行くことも困難で、呼吸苦もあり寝返りも大変な状況になっていました。
- ・そのため、退院が近づく中、Aさんはご自身の体調への不安と奥様の介護負担を考え、自宅で過ごしたいという思いの一方で、自宅に帰ることに不安を感じ、「在宅」か「入院の継続」か迷うようになっていきました。



(2) 奥様の心境

- ・当初よりご主人の気持ちを思い、できれば自宅で過ごさせてあげたいと話されていました。
- ・だ、ご主人の病状が悪化するにつれ、ご自身にも持病があったことで、変時の対応について不安が募っていました。



(3) 退院までの経緯

- ・ご本人の心の動きはありましたが、当初希望の「住み慣れたご自宅」でできるだけ過ごさせてあげたいと、ケアマネ他関係者は、介護用ベッドの他、車いす、手すり、ポータブルトイレ等を揃え、ご自宅の居住空間を整え、訪問診療医や訪問看護師もいつでも受入れできる準備をしていました。
- ・Aさんやご家族には、在宅を支える医師や看護師から、24時間の電話相談や緊急時の対応、退院後も希望により再度入院することも可能であること等を説明する中、不安はあるものの自宅での療養を決断され、在宅での療養がスタートしました。



(4) ご自宅での状況、最期は病院にて

- ・呼吸が苦しい状況であったため、在宅酸素療法（病院と同じように在宅でも酸素を吸入で投与する治療が可能です）も取り入れました。
- ・ご自宅では、寝室ではなくご家族が集うリビングで過ごすことを希望されたため、介護用ベッドをリビングに設置し、いつも奥様と一緒に生活されていました。
- ・ただ、体調がさらに悪化してきたこともあり、Aさんご本人から再度入院したいとの申し出があり、その希望を尊重し、再入院となりました。そして、数日後ご家族が見守る中、病院で最期を迎えられました。



<解説>

- ・一度自宅での療養を選択したら、「同じ病気で再入院することは難しい」と考える人も多いと思います。
- ・でも実際は、ご本人の状態や気持ちの変化、ご家族の状況により、例えばガン末期の時等は再度入院されるケースが結構あります。
- ・そもそも、自宅で最期を迎えたいと思う方もいれば、病院で最期をと考える方もいます。また、一度決めても病状やご家族の状況により、気持ちが変わるのは当前ですので、ご自宅に訪問するケアマネや医師等に正直に気持ちを打ち明ければ、対応を考えてくれます。
- ・特にガン末期の患者様には、医師がご希望をお聞きしながら、将来的な選択肢として緩和ケアの病棟がある病院を紹介したり、時には（将来再入院するかどうかは別として）早めにそのような病院での面談の機会を設けることで、ご本人やご家族の不安を和らげることも行っています。
- ・Aさんは最期は病院で亡くなられましたが、ギリギリまでご自宅で過ごされ、奥様も含めて思い出に残る悔いのない最期を迎えられたのではないのでしょうか。

☆ご質問・ご相談等、  
 お気軽に声掛けください。

安心を  
 お届けする



わかばクリニック

〒862-0903 熊本市東区若葉3-13-20  
 ☎096-285-6014 web: wakaba-cl.jp